会報

第 18 号（2014/1/16）

広島県福山市木之庄町４－３－１４
Tel&fax: 084-917-5937
e-mail: info@crrc-fukuyama.org
CRRC
CommunityRenaissanceResearchCe

2014年 年頭にあたって

代表理事　安川悦子

2014年、新しい年を迎えておめでとうございます。

昨年の、暑くて長い夏がなかなか終わらないと思っている間に、「けやき」や「いちょう」の木の葉がいつのまにか落ちて、すっかり冬の景色になっています。「冬来たりなば春遠からじ」という言葉をしきりに思い出す今日この頃です。今年も元気に活躍しましょう。

昨年11月末、国際経済学者の浜矩子さんの講演を聞きました。いま日本では国家的な枠組みを強化し、戦争をおしすすめようとする空気がただよいはじめていますが、経済、とりわけカネ（為替や株）の取引の上では、今や国家の枠組みは解体してしまっていて、グローバルな世界が支配している。つまり国家の政策はおよばなくなっているといいます。そうした中で私たちはどう生きるべきか。私たちの日常生活の場であるコミュニティを自立的に組みたてなおすしかない。そしてこの自立した地域コミュニティの住人たちが、国家の枠をこえて、つまり国と国との対立をやめて、グローバル市民として生きる。浜さんは、『新・国富論―グローバル経済の教科書』（文藝春秋、2012年）でも同じ議論を展開しています。いささか空想的にもみえるこの浜矩子さんの議論は、しかし2014年を生きる私たちにとって、もっとも現実的な考え方であるかもしれないという気がしてきます。

NPO法人・コミュニティルネッサンス研究所も創立されてあしかけ5年目に入ろうとしています。高齢者の活力と生きがいをもとめ、コミュニティの再生を計ることを目的とした研究所の活動もすこしずつ足場がととのえられつつあります。また、その向かうべき目標も見えてきました。浜さんのいう、人間が生きていく基礎単位としてのコミュニティの再生のために、楽しく働き、楽しく遊ぶ、そのために場を整え、仕掛けをつくる。この目的にむかって今年も歩んでいきましょう。

仁伍広場に設けられたトンド

1・2月の行事予定

1月26日（土）

都市農業を考える連続講座　第3回

出口から考える食と健康

・場所：ルネッサンス研究所集会室

・時間：14時～16時

・講師：当会理事　加納三千子さん

このところ野菜の値段が高くなり、人参なども輸入物が出回っています。

農業問題は私たちが安心・安全な食べ物を手に入れ、健康な生活を送ることと密接に関わっています。最近は、食べ方はうつ病など心の健康とも深く関わっているという人もあります。そのあたりのことをご一緒に考えてみましょう。

3月1日（土）

老いと死とのつきあい方

・場所：ルネッサンス研究所集会室

・時間：16時～17時30分

・講師：名古屋市立大学教授　別所良美さん

今私たちが定年を迎えてからの余生は平均約20年あまりになります。

加齢と共に心身にさまざまなトラブルが生じてきますが、その間をどのように老いや死と向き合えばよいのでしょうか。そのあたりのことを考えてみませんか。

Faxまたはメールで申し込んでいただければありがたいです。

夢のみずうみ村」視察研修ツアー

感想文　パート2

安川　悦子さん

（前号よりの続き）

ここは、正式には「社会福祉法人・夢のみずうみ村・山口デイサービスセンター」と呼ばれ、介護保険でまかなわれる「通所介護事業所」の一つである。ここでは、「要支援」あるいは「要介護1～5」と認定された高齢者が費用の1割を負担して、週に2日ほどここに通ってくる。「夢のみずうみ村」の村民として登録されるには、こうした資格がいるのである。しかし一旦村民と認定されてしまうと、ここでは、風呂にはいったり、リハビリの訓練をしたりするだけでなく、「生きるエネルギーを再生産する」ために、生きていることを味わい楽しむためのリハビリを行い、自分の中に隠れている能力を再発見し、それをうまく利用して社会的に生きる意味をみつけるところだと、されている。

そのための仕掛けはユニークである。「弱者」を保護・介護するというこれまでの高齢者介護観に支えられた施設とはおよそ異なっており、それを実感できる仕掛けがこの「村」には組み込まれていた。

その第1の仕掛けは、自己選択自己決定原則である。この「村」での過ごし方は、自分で決めるということになっている。あらかじめ用意されたプログラムにしたがってみんなが一斉にリハビリをするというのではないということである。施設のスタッフは、その決定のために援助をすることはあっても、指導はしない。自分が何をしたいのかを自分で見つけることも、この「村」の住人になるための重要な条件なのだ。

第2の仕掛けは、この「村」には、通常の社会の経済的な仕組みが、擬似的に取り込まれていることである。「村」では「ユーメ」という通貨が流通しており、それを使って利用者はこの施設を利用することになる。「村民」として認められると、この「ユーメ」を資金としてもらえる。これを使って、好きなリハビリ運動をおこない、娯楽をおこない、食事をし、コーヒーをのむことができる。つまりこの施設が展開するさまざまなリハビリプログラムへの参加や、飲食や、フリーマーケットでの買い物などが行えるというのだ。

そしてここからがユニークでおもしろいのだが、この「ユーメ」をどのようにして稼ぎ貯めるかは個人の才覚によるということになっている。「ユーメ」を「村」がもつ「銀行」に預けて利息をえることもでき、「村」の中に開設されている「カジノ」で稼ぐこともできる。うまくいけば一攫千金を手にすることもできる。

しかし「ユーメ」を稼ぐもっとも着実で基本的な方法は、一般の社会と同じように「はたらく」こと、つまり自分の頭や体を動かすことであると

されている。ここからが一般の社会と異なるのだが、朝この「村」にやってきたら、自分の頭を使って一日の予定をたてる、自分で自分の健康をチェックする、つまり血圧を測定したり検温をしたりする、自分の食器を自分で保管ケースに移すことも、万歩計を使って歩くことも、頭の体操ドリルに挑戦することも、タイムトライアル歩行に挑戦したり、自分史をつくり公開することも、すべてこの「村民」にとっては「はたらく」ことなのであり、「ユーメ」を稼ぐ手段なのだ。さらに、施設運営のための内職や手伝い、例えば、講演会案内状の発送、植物のみずやり、草取り、子どもたちの遊びの手伝いなど、さらに上級では、見学者のための水先案内、利用者への手伝いなどもこうした「ユーメ」を稼ぐ「はたらく」こととして認定される。

第3の仕掛けもまたユニークである。

人は「自分で立つ」ことがもっとも大切だというのが、この「村」モットーになっている。そのためのさまざまな仕掛けがこの施設には施されている。「バリアアリー」というこの施設の特徴は、そのための目に見える仕掛けである。車椅子からはなれて何とか人の手をかりないで伝い歩き、つまり「もたれかかり移動」あるいは「寄りかかり移動」をする。どんな方法でもよいから、まず「立つ」。そして生活できる能力を身につける。介助はそのための手段にすぎない。立つだけでなく脳を活性化するためのさまざまな仕掛けも用意されている。片マヒでも爪を切り、パソコンを操作し、料理をする。そしてそれを自宅に持

タンス街道

利用者の作品

ち帰って披露するというプログラムもある。家で使うモノを製作する。苗を持ち帰り家で育てる。パンなどを作って家に持ち帰る。目に見える自分の労働の成果を、まずは家族に披露する。これは「宅配ビリテーション」と名付けられたプログラムとして展開されている。自分の「はたらき」の成果をまずは家族に認めてもらう。これこそが自立の第1歩なのだというのである。

第４の仕掛けは、人と人とのふれあいである。「みんなちがって、みんないい」ことを認め合う仲間がいることを実感するという仕掛けである。

人は、どんな障害をもとうと「はたらき（自分のもっている能力をフルに使って）」を通して「ひととつながる」。これは、経済学の基本的な原理なのだが、ここでは、わかりやすい形でこの原理が提示されている。その一つが、若い時代、実際の社会で見つけた技能を、ここで披露し、他の村民に教え合うという、「師範・師範代制度」である。料理の仕方、ちぎり絵の作り方、俳句の詠み方、あるいは書道など、「村民」がもつさまざまな技能を、「村民」同士で教え合う。ひとは、自分の「はたらき」をつうじて人と関わり合うという仕組みが、こうした形で実現されているのである。

「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの心は、こうした形での、みんな「はたらきあい」みんな「みとめあう」仕掛けとなって、具体化されているのである。「夢のみずうみ村」は、こうした意味で、高齢者たちの「コミューン」あるいは「ユートピア」であった。障害高齢者たちが、自分の「隠れた能力」や、埋もれている「生活できる能力」を再発見し、それを利用して生きるエネルギーを「再生産」するところだということが、こうした仕掛けをとおして理解できるように思えた。

この「村」に着いて見学の手続きをしているときに私が感じた、雑然としたエネルギーの源は、これであったのだ。生きるエネルギーをここで「再生産」する。その仕組みが、「デイサービス」施設としての枠組みの中に組み込まれているのだ。

人は「はたらいて」、仲間に認められ（評価され）、仲間を認めあう。社会を構成するこの基本原理が、この「夢のみずうみ村」で現実にどこまで貫き通り、どこまで実現しているのか、つまり障害高齢者の自立をどこまで促し、生きがいを与えているのか。２時間ほどの施設見学では、行き届いた「水先案内人」の説明からだけでは、つかみ取ることはできなかった。しかし、この「村」を支える基本理念とそれを現実化するユートピア的ともいえる仕組みは、「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの詩のこころを体現するものだと思えたことは確かである。

「夢のみずうみ村」見学の前日に訪れた「金子みすゞ記念館」でのみすゞの詩から受けたインパクトとともに、私にとっては、「高齢者」としての生き方問題だけでなく、グローバル化している経済社会とその中でのコミュニティのあり様を考える上でも、大きな刺激になった。収穫の多いツアーであり、このツアーを企画したコミュニティ・ルネッサンスの事務局に感謝をしたい。

辞書を引きながらクイズに答える

古代山陽道 近世山陽道をめぐる
～神辺 駅家 新市の歴史観光トレイル～

12月7日は心配された空模様も小春日和の1日で、無事、古代山陽道・近世山陽道をめぐるツアーを実施することが出来ました。

当初19名の参加予定でしたが、直前にキャンセルが2名あり17名（内1名は3才で会費はもらわない）での行事となりました。その内約半数は福山市の広報を見ての申込みでした。

二子塚では、教育委員会の方が来て鍵を開け、古墳内部の照明準備もして待っていて下さいました。古墳入り口あたりでの説明に続いて塚内部に入っての説明、最後には塚上部に登り、北側に残る古墳の形を確認しました。

次の備後吉備津神社（通称一宮さん）では、佐藤先生と参加した本会会員とも顔なじみであった権禰宜（ごんねぎ）の方から神社の建物配置の特徴や本殿の建築様式などの説明を受けました。

次いで大坊福盛寺に向かい昼食。その途中、服部の大池から福盛寺への道は一宮さんに参拝する道であり、蛇円山のふもとから福盛寺、備後吉備津神社にかけての一帯は一大文化圏をなす、信仰の地でもあったとの説明を受けました。

時間が押していたため、先に神辺本陣、廉塾へと向い、本陣ではボランティアガイドの方から説明を受けました。本陣から廉塾へ徒歩で移動の途中で、城下町の特徴や高屋川とのかかわり等の説明を受けました。廉塾の見学終了後はバスの中から国分寺、古代山陽道、堂々川砂留群の説明を受け見学しました。

実際に二子塚内部に入ることが出来た上に、佐藤先生から丁寧な説明をして頂き、参加者からは「自分達だけで行ったら分からないけれども詳しく知れて良かった」という声がありました。また、東京からUターンした方もあり「福山はせっかく色んな観光資源がありながら、どれも全部バラバラなのが残念だとかねがね思っていたが、テーマを設けての歴史観光ツアーであったので参加した」という声もありました。

福山市観光課の後援を頂いて実施した今回の企画は、普段見慣れた当たり前の景色を先人達の生業の歴史の視点からとらえることが出来、福山市の観光振興にいささか資することが出来たのではないかと自画自賛しています。

二子塚での説明

本陣での説明

参加者からの感想文

府中町から参加の荻野さん

「古代山陽道・近世山陽道をめぐる歴史観光トレイル」にお誘い頂き、ありがとうございました。

ここまでの企画には、どんなにか真髄を傾けてこられたことかと拝察いたしました。

冊子もとても読み易く、状況がよくわかります。

佐藤先生の懇切丁寧な解読と歴史観光トレイルの本をめくりながら、神辺平野に古代、近世、現代へと息づいてきた、人々のたしかな生活に思いをはせながら、重厚な時間を過ごさせて頂きましたこと、感謝に耐えません。

普段の観光ツアーでは人の生き様、感動の人間模様には中々出合えませんが、この度は、この地で足ふんばって累累と築かれていった時々の人々の生活を感じることができて、帰宅後も心洗われる思いを持ち続けております。

現在、御自分が住むこの地をもっと知りたいと参加された皆さんの感動はいかばかりかと思います。

・二子塚古・・

感動しました。古墳めぐりは好きで、東広島の古墳群にも足をむけることがありますが、まさに、はっきりと形を成した前方後円墳の石室の中に入れて頂いたり、古墳の上に立つことが出来るとは想像だにしていませんでした。広報されると押しかける方は後を断たないのではないでしょうか。近ければ何度でも訪ねたいところです。

備後吉備津神社・

神社の禰宜さんの話も加えて頂き、土地の人々と神社の結びつきの深さを知ると共に、信仰を深めるために神社が霊験あらたかな神社であるための建築の方程式を考えた古の人々があるということ、人間っていつの世でもすごいなと思わされます。

大坊福盛寺、神辺本陣、廉塾・・・どれ一つとっても貴重な訪問先であり、説明を受けながら車中より拝見した箇所箇所、一生懸命に眼に焼き付けてきました。

歴史を通して人々の生き様にふれ、今一度自分の生き様を反省し、生きるよすがにしたいものです。

個人で一日だけでの時間でこれだけの見学は不可能であり、再訪問を考えても一カ所さえ道がわからないのでウロウロするにとどまるのではないかと懸念しています。

この度の企画に参加させて頂きありがとうございました。

吉備津神社で権禰宜さんからの説明

地域の絆主催の 仁伍音楽祭 餅つき大会に参加しました

11月17日の仁伍音楽祭では、いつものようにリサイクルバザーの出店をしました。今回はそれに加えて地域の絆の利用者さんと作った小物の販売をしました。

小物を並べて準備しているところへ、「これ作ったよね」といいながらデイの利用者さんが来られました。

そしてのぞきに来たお客さんに「これ私が作ったのよ。買ってちょうだい」といいながら嬉しそうに売って下さいました。最後にはまとめて買って下さる方があり、完売でした。

12月23日の餅つき大会では、柚を5個ずつ袋に入れ15袋売りました。何十年ぶりかで少し餅つきをしました。久しぶりでも体は覚えているものですね。11月17日には6名の方が、12月23日には4名の方がお手伝い下さいました。

編集後記

皆様どのようなお正月をおすごしでしたでしょうか。

私はお正月を迎えてからの年賀状を書きながら、今年はどんな年になったらいいかな、と思っていました。そして連休には小学校を卒業して58年ぶりのクラス会（一クラスしかありませんでしたが）に出席してきました。88才を迎える恩師も迎え、はじめは誰だろう、という人がいてもすぐにヤンチャな小学生に逆戻りでした。話しているうちに、お父さんが戦死、おじさん夫婦に育てられた、おじいちゃんおばあちゃんに育てられたというクラスメートが結構あり、小さくても時代の影響はもろに受けて育っていたのだなあ、と思ったことでした。

このところ可世木さんも風邪引きなどでお休みです。お近くに来られたときには遊びに寄って下さい。

（加）